書　評

㈱ほんの木 発行　　アーネスト・カレンバック著，三輪妙子訳

# 「緑の国のエコトピア」

## 上巻「エコトピア国の出現」・下巻「エコトピア・レポート」

評者 佐野　寛
Hiroshi Sano

カレンバックが最初のエコトピアを描き始めた1975年には，石油第一次ショックにより不安の種が蒔かれたとはいえ，まだ産業・経済の地球環境に対する侵食を問題にする人も少なかった．この時期に既にサステイナビリテイ（維持可能性）を優先するライフスタイルを持った社会の構想を提示し得たのは，まことに卓見といわざるを得ない．

米国西海岸でアマチュア高校生科学者の少女ルウが，新型の超高効率太陽電池を発明することから話が始まる．それが電力販売業界に打撃を与えるだけでなく，社会のシステムまで動揺を及ぼすに到って少女の身にも危機が迫る……いわゆるサイエンス・フィクションと思って読み進むと，自動車の廃止を主張していた「緑」勢力が盛り上がり，サバイバリスト党を結成し，米西海岸に生活者優先型の独立国を作る，という社会小説に変身してしまう．

エコトピア独立はしかし，苦難の道である．緑の政党には提案能力が乏しいと言われないために，著者が必死に頭脳を絞っていることがよくわかる．だが，西海岸地域がもともと自然に恵まれ，自給自足型に向いていることも幸いして，エネルギー・原発・農薬・ガン・自動車・国際紛争などすべての問題を，エコロジー的新手法を駆使して次々に意表を突く政策を打ち出して切り抜けて行くストーリー展開は見事である．

重工業を中心とした経済成長率はマイナスに転じ，エコノミストたちはこの国がすぐに崩壊すると予測した．しかし一向に急迫感はなく，エコトピア人の生活にゆとりと文化が生まれてくる状況が描かれる．経済成長の奴隷だったことを笑う余裕さえも出て来る．高速道路の縮減・緑化と鉄道の復活は，ライフスタイルの変革による真の豊かさの追求（牧歌的であるが）の象徴でもある．

この小説は技術的に時々不完全で，例えば太陽電池がいくら優れていても，昼夜のエネルギー需要に対応するには電力貯蔵がネックになる．ところが，著者はこれに関心がないらしく，電力貯蔵なしで何も支障が起きない，というちょっと間の抜けたところもあり，それもご愛嬌である．

サンフランシスコやシアトルはエコトピア国の中心地だが，村落共同体の連合みたいなもので，首都といった雰囲気はない．ロスアンジェルスはエコトピアに参加せずアメリカ側に付く．これは農林業圏：工業圏の仕分けに，ほぼ対応する．

下巻は米人レポーター，ウェストン記者による独立から20年後のエコトピア国訪問記になっている．

独立交渉のこじれから国交断絶が続いた米国内には，エコトピア思想の波及と同時に，武力再統合のタカ派の勢力も強い．あわや米国陸軍の侵攻，という場面もあるが，その寸前に中東地域で紛争が勃発して，エコトピアは救われる．

省エネルギー的合理化で自給自足型の国家を達成しているエコトピア国政府は，ウェストン記者の来訪にいささか当惑する．この記者をめぐり両国政府と，さらにいろんな思想信条の男女の思惑が入り乱れ，カラフルな物語が楽しめる．

エコトピアの人口は微減をたどっているのに，誰も危機と感じない．産業重視に対し生活重視，成長指向に対し安定指向と，両文化の差異が到るところで噴出する．マリファナとフリーセックスの色どりは少し出来すぎではあるが，ウェストン記者はガリバー旅行記を書くような不安と幸福感の入り混ざった気分で漂い歩き，せっせとアメリカへ記事を送る．読者も，一緒に未来社会の生き方を探りながら「自分ならどうする」という旅を味わうことができる．

なお，エコトピア国の南端とされるカリフォルニア州中央部のテハチャピ峠には今，世界最大級の商業発電の風車群があり，ロスアンジェルスに電力を売っている（日本人の見学の名所にもなっている）．小説には出てこないが．

* 大阪ガス㈱基盤研究所所長付
〒554 大阪市此花区酉島6-19